



〈編集・発行〉
独立行政法人 国立病院機構
奈良医療センター
<https://nara.hosp.go.jp/>

りえぞん

Liaison

vol.40

独立行政法人国立病院機構 奈良医療センター

令和元年 8月

医療関係者の皆様へ 「りえぞん」(Liaison)とは、フランス語で「連携・つなぐ」といった意味をもちます。奈良医療センターは、地域の医療機関との連携を深め地域医療の推進に努めていきたいという思いで付けました。

病院理念

私たちは、質の高い医療を提供し、地域の皆様の健康を支援することにより、信頼される病院を目指します

令和元年度 病院目標

呼吸器疾患と神経疾患を中心とした「面倒みのよい病院」の機能を高める

残暑お見舞い申し上げます

副院長 玉置 伸二



平成の時代から令和の時代になり、初めての厳しい夏を迎えておりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

さて、当院が属しております奈良医療圏におきましては、今後も人口は引き続き減少していく見込みです。しかし、一方で65歳以上の高齢者人口は増加し続け、人口に占める割合も2025年には33%に達する見込みです。このようなことを背景として、各医療機関に対しては地域における役割を明確として、医療提供機能を強化することが求められています。当院におきましては、「奈良医療センターならでは」の特色ある医療を提供しながら、地域包括ケアシステムを支える「面倒見のいい病院」をめざすこととなります。

当院が以前より担ってきた、結核医療、重症心身障害児(者)、筋ジストロフィーを含む神経難病患者に対する医療などのいわゆるセーフティーネットワーク系医療につきましても、今後も基幹施設としての機能を充実させ、その役割を果たしていきたいと思っております。

てんかん、パーキンソン病、ジストニア等を対象とする機能的脳神経外科分野や高次脳機能障害に対する診療は地域のみならず近畿地方でもトップクラスであり、当院の大きな特色のひとつです。今後も県内外から多くの患者さんを受け入れたいと思っております。

呼吸器疾患に対する診療も、当院の特色のひとつです。肺結核や近年増加が著しい肺非結核性抗酸菌症をはじめとして、肺がんや間質性肺炎、COPD(慢性閉塞性肺疾患)、気管支喘息、睡眠時無呼吸などに対する専門的な診療を行っています。なかでも重症・難治性喘息に対しては生物学的製剤による治療や気管支鏡による治療(気管支サーモプラスティ)に積極的に取り組んでおり、近隣施設や遠方からも患者さんをご紹介頂けるようになりました。今後はCOPDなどに対する包括的呼吸ケア・リハビリテーションにも注力していきたいと思っております。また当院は日本アレルギー学会の教育施設でもあり、喘息だけではなくアレルギー性鼻炎に対する舌下免疫療法、成人食物アレルギーに対する診療なども行っております。

地域包括ケアシステムにおきましては、当院の特色である呼吸器疾患、脳神経疾患に対する強みを活かしながら、その役割を果たしていきたいと思っております。当院看護部には皮膚・排泄ケア、摂食・嚥下障害、認知症、慢性呼吸器疾患それぞれのエキスパートナースが在籍しており、リハビリテーション部門などとも連携しながらチーム医療を充実させて「質の高い面倒見のいい病院」をめざしていきたいと思っております。例えば高齢者の誤嚥性肺炎に対する診療におきましては、当院では抗生剤などによる原疾患に対する治療のみならず、摂食嚥下機能に対する評価やリハビリテーションもシームレスに行うことが可能となっております。

今後は、急性期・超急性期病院や、地域の医療施設、各種介護事業所の皆さまとの連携をさらに深めていく所存ですので、何卒宜しくお願い致します。

Contents	●残暑お見舞い申し上げます	1	●七夕コンサートを開催しました	4	●着任ご紹介	5
	●シドニーの学会に行ってきました!!	2	●虐待防止研修会を開催して	5	●連携施設のご紹介コーナー VOL.2	6

学会に行ってきました！！（シドニー編）

院長 平林 秀裕



オペラハウス



Neuromodulation Society's 14th world congressがオーストラリアのシドニーで、5月25日～30日の日程で開催された。私は、国際ニューロモジュレーション学会の日本支部長ということもあり、日本におけるニューロモジュレーション療法の現状を報告した。

ニューロモジュレーション療法とは、パーキンソン病、本態性振戦、ジストニアなどの不随意運動、難治性の痛みや痙縮などを電気刺激や薬物の髄腔内投与で治す治療方法です。つまり、脳はたくさんの神経細胞からなりますが、これらの神経細胞がネットワークを作って働きます。そこで、調子の悪い神経回路の一部を電気で刺激して修飾することで、その回路の働きを正常化させるのです。

例えば人前で署名しようとするとき、びるびる震えて字が書けなかったり、コップで水を飲もうとすると震えて飲めなかったりする本態性振戦の患者さんの場合は、視床腹側中間核というところを刺激するとたちどころに震えを止めることができます。生命を脅かす病気ではありませんが、日本には100万以上の患者さんがいて、少なくとも20～30万人の人は、手術をした方が良いとされています。既に20年前から保険適応になっていますが、年間の手術件数は、僅か200件程度に留まっています。その理由の一つは、「震えは、治らないとか」「年寄りの中風は仕方ない」という迷信であったり、医師の中にさえ、「震えの手術なんてあるんですか」と言う先生がいたりします。外来で、患者さんに「震えを止める手術がありますよ。」と説明すると「初めて聞きました。」と言われることもあり、「震えは、手術で治る」というPR活動や啓蒙活動が、足りないと感じることも多いです。

脳深部刺激療法は、パーキンソン病にも有効である。薬の治療を続けていると、いつかオン・オフ



国際コンベンションセンター



国際会議前のオブジェ

現象に悩まされるようになる。そこで、淡蒼球や視床下核というところを電気で刺激すると、オフが改善されて、歩行も改善される。薬の量を減らすこともでき、薬だけの治療より5年以上、元気で過ごせることが世界中で証明されている。

また腰痛や下肢痛の患者さんには、脊髄電気刺激療法が威力を発揮する、この方法は、背骨と脊髄を包む硬膜の隙間に細い針金のような電極を留置して、脊髄を刺激するのであり、安全性の高い治療方法である。腰痛や下肢痛の治療には、まず薬、次に注射によるブロック療法やマッサージ、指圧なども行われますが、それでも治らない痛みがあります。そのようなときは、我慢するのではなく、是非、試すべき治療です。これらは、ニューロモジュレーション療法の一部にすぎません。世界では、薬漬けになっている精神病患者さんを電気刺激で救ったり、てんかんを治したり、治療のみならず、人の能力をたかめることにも応用されはじめています。

当院は、これまでに数多くのニューロモジュレーション療法を行い、熟練のスタッフが充実しています。「治らない」と思っている病気が治せるかもしれません。

本態性振戦、パーキンソン病、書痙、ジストニア、難治性疼痛、痙縮などで、悩まれている方は、是非一度ご相談ください。



プロジェクションマッピングをしているオペラハウス



七夕コンサートを開催しました

患者サービス向上委員会 主任保育士 長沼 知樹

7月3日(水)、当院外来ホールにて夏の恒例イベント、七夕コンサートを開催しました。

コンサート当日は梅雨時でもあり天候を心配していましたが、晴れ間も見られ七夕にふさわしいお天気となりました。また、多くの患者さま・ご家族の皆さま・地域の皆さまにご参加いただく事ができました。

七夕コンサートでは、毎年職員による演奏等を企画し、今年も楽しい雰囲気の中で様々な催し物が行われました。

オープニングは内科医師によるバイオリン演奏で、涼しげな音色がホールに鳴り響き、皆様の心も癒される空間となりました。

続いては療育指導室職員による「七夕」の劇が行われました。織姫や彦星等に扮した職員が役になりきり、笑いあり涙ありの劇となり会場も盛大に盛り上がる事ができました。

そして療養介助員による歌の披露では、気持ちのこもった歌声で、とても美しい美声に会場もうっとりするような雰囲気で「糸」「涙そうそう」「ハナミズキ」を熱唱しました。

最後は毎年大トリを飾っている言語聴覚士によるホルンと看護師によるサクソ演奏を披露しました。「ふるさと」「川の流れるように」をホルン演奏。「アメイジンググレイス」「A Hole New Word」をホルンとサクソのコラボ演奏でコンサートを最後まで盛り上がる事ができました。アンコールでは「見上げてごらん夜の星を」を会場の皆さんと合唱し、七夕の雰囲気を感じる和やかなひと時を過ごしました。

今後も患者さま・ご家族の皆さま・地域の皆さまへ、心の安らぎや楽しい時間の提供ができるように、様々な内容を企画していきたいと思っております。



虐待防止研修会を開催して

医療安全管理係長 中田 雄三

みなさんもお存じの通り、平成24年10月1日から、障害のある人の権利利益を守るための法律である「障害者虐待の防止、障害者の養護者に対する支援等に関する法律（障害者虐待防止法）」が施行されています。障害のある人に対する虐待は、その尊厳を害するものであり、障害のある人の自立や社会参加にとって、その虐待を防止することは極めて重要です。この法律では、障害のある人に対する虐待の禁止、その予防および早期発見などについての国・地方公共団体などの責務と役割、虐待を受けた障害のある人の保護や支援等について定めるとともに、障害者への虐待を発見した人には、市町村や県への通報が義務づけられています。また、利用者の人権擁護、虐待の防止等のため、病院や福祉施設は責任者を設置する等必要な体制の整備を行い、その従事者に対し研修を実施することに努めるよう定められています。

そこで今年度も、療育指導室と協同で虐待防止研修会を開催しました。医師、看護師、メディカルスタッフ、事務職員、全職員全職種と一緒にロールプレイ形式で研修を行いました。ロールプレイの内容は、不適切な患者対応の模擬事例で、相談窓口職員、看護師長、副看護師長、看護師、保育士が模擬カンファレンスを行うもので、医師が看護師、事務職員が看護師長など参加者の実際の職種と異なる職種や役割で、その役になりきって行いました。日頃の業務とは違った役割を演じることで気づかされることも多く、研修を通して、これまで当たり前のようにやってきたことが本当にこれでいいのか？第三者が見た時におかしいと思わないのか？など、日ごろの業務や対応を振り返るきっかけにもなり、有意義な研修になりました。

「当たり前」「こうあるべき」これらは時代によって、また、時と場合、人によって見方や解釈も変わってきます。だからこそ、誰に見られても恥ずかしくない医療を提供することが大切です。いつの時代でも医療の中心は患者です。患者・家族・職員間の良好な人間関係や信頼関係を大切しながら、病院の目標でもある「面倒見のよい病院」をめざしたいと思います。



着任ご紹介



高橋 輝一

2019年7月より着任しました内科の高橋輝一と申します。肺結核を中心とした抗酸菌性感染症や間質性肺炎、肺癌、気管支喘息、COPDなど呼吸器疾患は多岐にわたります。一人ひとりの患者様、ご家族様に喜んで頂けるよう精進してまいりたいと思っております。

今後とも何卒よろしくお願ひ申し上げます。

趣味：ゴルフ

特技：子供のために虫を探すこと

おおもりクリニック

大森 正晴 先生



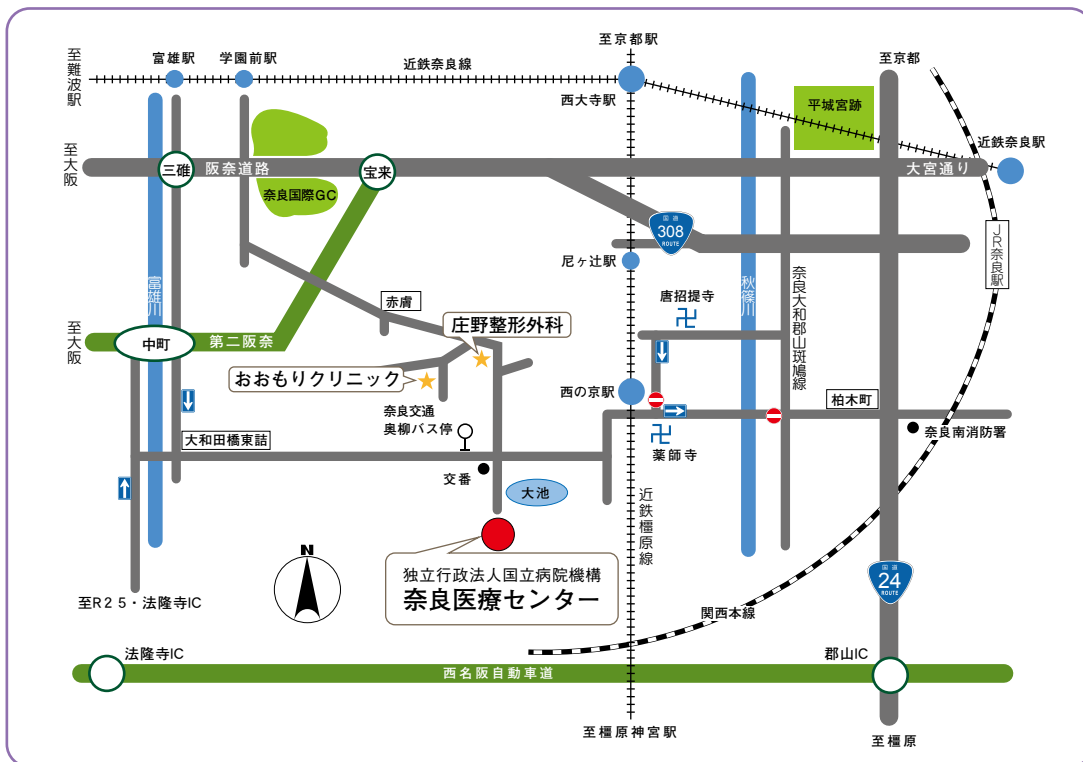
奈良市六条で 内科・循環器科のクリニックをさせていただいております。奈良市立六条小学校・六条幼稚園に隣接しており、登下校の時には、子供たちの元気な声が聞こえてきます。2001年の開業以来18年間、地域の方々の健康管理に努めて参りました。「人にやさしいクリニック」をモットーに、スタッフと協力し、何でも気軽に話せる雰囲気づくりに力を入れております。

開業医の役割は、自院で治療できる病気とそうでない病気を素早く判断し、専門的な治療が必要な場合はすみやかに医療機関に紹介することだと思います。地域のかかりつけ医として、患者さんを取り巻く生活環境を把握し、日々の診療に活かしながら、病気の早期発見、早期治療につなげるよう努めています。そのために、私どものクリニックから最も近くにある奈良医療センターさんとの連携はかせないものです。

この六条地域に根ざすことによって迫りくる超高齢化社会に対し、高齢者の方々と病院との橋渡しという重要な役割を果たして参ります。唐招提寺、薬師寺という歴史的景勝地に囲まれた美しい地域であると同時に、奈良医療センターさんの力を借りて、医療の面でも安心して暮らせる街にしていきたいと願っております。

診療科目：内科・循環器科・リハビリテーション科・循環器内科

診療時間：月～金 9:00～12:00 16:30～19:30 土 9:00～12:00



独立行政法人 国立病院機構
奈良医療センター
地域医療連携室

〒630-8053
 奈良市七条2丁目789
 TEL.0742-45-4591 (代表)
 TEL.0742-45-1563 (直通)
 FAX.0742-45-4901 (直通)